

個性がつかないだ奇跡

— デザイナーたちが生んだアジアパラ公式グッズの物語 —

名古屋にある小さな会社。

株式会社ブリッジエンジニア。

この会社には、少し変わったチームがある。

- ADHD のデザイナー
- エンジニア出身のデザイナー
- デザインを整理するのが得意なスタッフ
- 人を支えることが得意な仲間

みんな得意なことが違う。

そして、苦手なことも違う。

しかし、この「違い」こそが、

奇跡のデザインを生むことになるとは、まだ誰も知らなかった。

自分の個性が「弱点」に見えていた

二人のデザイナーがいた。

二人とも ADHD。

頭の中には、

人よりも多くのアイデアが浮かぶ。

しかし現実では、

- 作業が整理できない
- 締切を守るのが苦しい
- 集中が続かない

周囲に迷惑をかけてしまうこともあった。

「自分はデザイナーに向いていない」

そう思い続けていた。

長い間悩み続け、二人とも うつ病を経験した。

デザインが好きなのに、デザインが怖くなってしまった。

そんなとき舞い込んだ大きな仕事

ある日、会社に大きな挑戦が舞い込んだ。アジアパラ競技会の公式グッズ制作。

パラスポーツの大会。

障害を持つアスリートたちが世界に挑戦する舞台。

社内に緊張が走った。

そんな大きな仕事をこの会社ができるのか。

社長の一言

社長は、デザイナーたちに言った。

「この仕事、みんなでやってみよう」

「一人でやる必要はない」

個性を認め合うチーム

チームが生まれた。

そのチームでは、あるルールが決まった。

苦手は助け合う。

得意は思いきり活かす。

ADHD のデザイナーは

次々とアイデアを生み出す。

普通の人が思いつかない

発想が飛び出す。

しかし、整理が苦手。

すると仲間が言った。

「アイデアは任せてください」

「整理は僕がやります」

「ライセンスの契約は私がやります」

逆に、デザインの感性で迷ったときは、ADHD のデザイナーが力を発揮した。

それぞれの個性が繋がった

エンジニアは、折り紙の折り方や折り紙をキーホルダーにする構造を考えた。

デザイナーは感性を注ぎ込んだ。

スタッフは全体を整理し、ライセンスの審査をパスするために注力した。

気づいたときには、誰一人欠けても成立しないチームになっていた。

行き詰まり

しかし、デザインは簡単には完成しなかった。

何度も作り直し。

何度も議論。

会議が止まることもあった。

そのとき、

一人のデザイナーがぼつりと言った。

「パラの選手って…」

「障害があるから

強いんじゃないかな」

その言葉に、全員の心が動いた。

テーマが生まれた瞬間

違いは、弱さじゃない。

違いは、力だ。

その瞬間、デザインのテーマが一気に決まった。

色が決まり、形が決まり、メッセージが決まった。

それは、個性を認め合うデザインだった。

完成したデザイン

完成したグッズを見たとき、

チーム全員が静かになった。

誰かが言った。

「これ…本当にいい」

そこには

- 努力
- 仲間
- 希望

すべてが詰まっていた。

奇跡は個性から生まれる

名古屋の小さな会社から生まれた

アジアパラ競技会公式グッズ。

それは

- ADHD のデザイナー
- 健常者のデザイナー
- エンジニア
- 仲間たち

みんなの個性が重なって生まれた作品だった。

最後に

パラアスリートは

それぞれ違う個性を持っている。
しかし、その違いが
世界を驚かせる力になる。
同じことが、このデザインチームにも起きていた。

個性を認め合うと、人は奇跡を起こす。

その証が、株式会社ブリッジエンジニアが生んだアジアパラ競技会公式グッズだった。